

## 合巻『繫馬七勇婦伝』三編について

### 其之二

檜山裕子

『繫馬七勇婦伝』三編について、次の項目にしたがって述べる。

#### 1、写真版コピーと翻字

#### 2、考察

#### 1、写真版コピーと翻字

写真版コピーは国立国会図書館所蔵本（請求記号 二〇七・九九三）のものを載せる。翻字は原則として記載通りとしたが、旧字体は現行のものに改めた。また読みの便宜をはかり、適宜スペースをいれた。

#### 〈三編下之巻表紙〉

三編 文政丁亥新春発市 永寿堂販

#### 〈三編下巻表紙見返し〉

繫馬第三編下巻 亥春新版 楚満人作 英泉画 永寿堂

#### 〈六十七丁表〉

#### 十四

○それはさておき たけじふみまどはいつぞやかまくなることぶきや太郎右衛門がいへにて 岩永がくみこらにとりまかれしが いがじゆ太郎がげんじゆつにてたすけられ ひとまつそのばはのがれしかかまぐらのほとりをはいくわいせんもいかゞなりとて みちのくのかたへくたり そここゝとへめぐりしが おときにもめぐりあはずい

たづらに一トとせばかりをへて もはやかまぐらきんへんへかへるともあやしむ人もあるまじと うつのみやまできたりしに ぼんおどりのありとて おちこちのひとくあしをそらにしてぼんそうするに たけじはふみまどにむかひいふやう われくふたりはさしていそぐたびにもあらず たゞしよこくをゆうれきして一トくせあるものとみるときはいろをもつてそのきりやうをためし みかたにまねきまたは ▲ ぐんやうをとくのへんとするよりほかなし さいはいなるかな ぼんおどりとてたうちはことにぎはへは われくふたりがなりはひのよすがにもなることのなからずや まづこのへんのりやうりぢややのたぐひにいりて きゝやはすべしと あたりなる福多屋といへるいへにいりてしゆかうをいゝつけ ふたりはしばしばじのうさをはらしいたるに にはかにそとものさわがしく そりやこそぬす人はとらへられたりなど のゝしるに たけじは

次へ

#### 〈六十七丁裏・六十八丁表〉

#### つゞき

ていしゆをまねき そのしさいをとふに あるじこたへていふ よふなにかはぞんじもふさず候へども たうしよのぐんじこがらしたん平といふ人のごけご ▲ おふくどのといふ人 ふたら山のおんなとうぞくをみしりてとらへしとのさうどう也 そのとうぞくはおんな六部なるよし さてくしれぬものなり しかも年わかきおんなにていたつてうつくしきよし たゞいまぐんじのやしきへひかれ候とかたるをきいて ふたりはかほみやわせ もしやきぬたのおとぎにてはあらざるや そのおんなをみたきものかなと

又

おもへど



十四



擊馬笏三  
編下卷  
亥春  
新版  
永壽堂



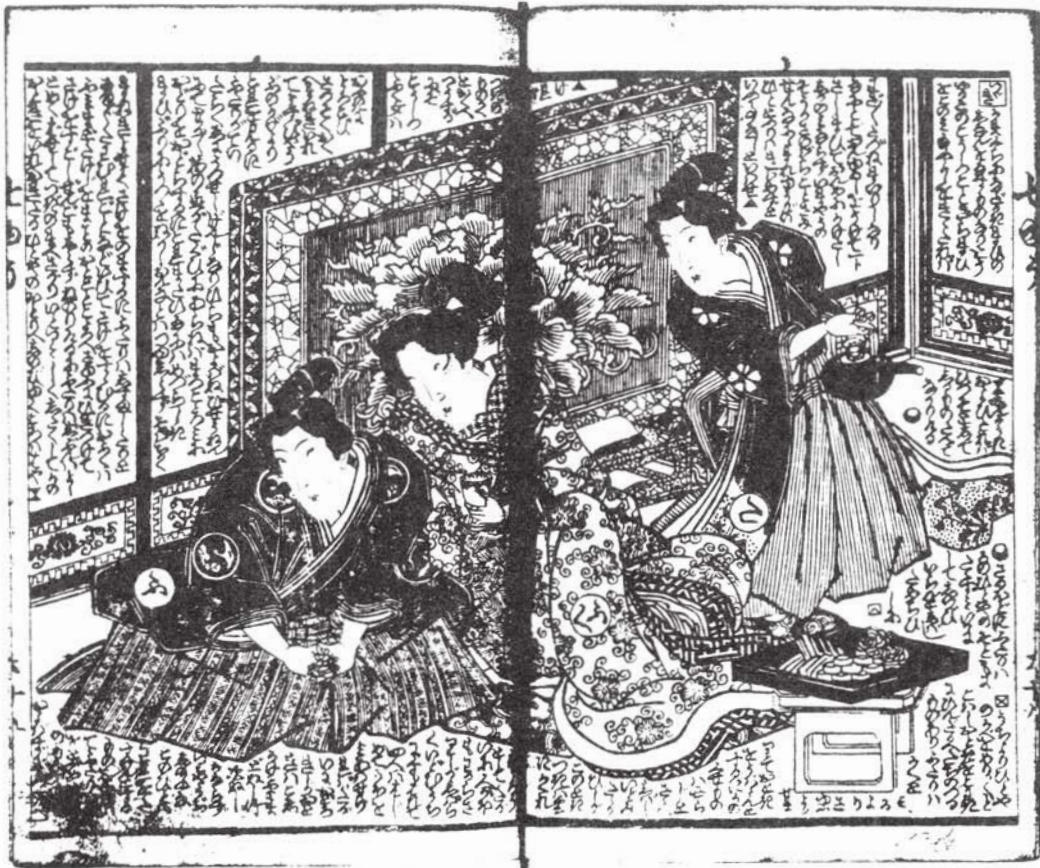
そふもいわれず たけじはなにくはぬかほにもてなし ていしゆにむ  
かひ ① なるほどのたもふごとく さるうつくしきおんなにて  
とうぞくならんとは いかなるおんな ㄨ ㄨ にや一トめみたき  
ものなりといへば ていしゆ又いわく されは候そのとうぞくをみた  
く思ひ給は、とうりうし給ひ ぐんじのしもやしきよりかみやしき  
へひかるゝとちうにてみ給へと 聞てたけじはさらばどふで三四日と  
ふりうせんとおもへば あすにてもみべしと そしらぬかほにてその  
さかやをいで はたごやにとりううしていたりしが はたしてゆふべ  
のおんなとうぞくのひかるゝよと 口々にのゝしるに ふたりはは  
たごやのかいよりひそかにのぞきみるに むざんやおときはうしろ  
でにくゝしあげられ ぐんじがくみこにとりかこまれてとふりければ  
ふたりはさてこそとおどろき いかにもしてすくはんものなりとお  
もへど せんすべなく いかゝはせんととつおいつ思ひまはしけるに  
かのこがらしどのゝこけはいたつてのいろこのみにて このたびの  
ぼんをどりもまことは美どうをあらむなりときゝしかば ふみまどた  
けじはいゝあはせてわかしゆのすがたとなり ぐんじがやしきにいた  
り いゝこみしは われゝ二人は

次へ

へ六十八丁裏・六十九丁表

つゞき かまくらになだかきまひのしなんをなすものなり とうやか  
たのこうしつことさらまひをこのみ給ふよしをきゝたれば わざゝ  
たづねまいりしなり なにとぞおんゆるしをうけて一トさしまひてお  
んめにつけたし しかのみならず いまやうのそうかさいばらことさ  
みせん なにゝまれゆうげいひととふりはきはめずといふ事なしとい  
はせ ▲ ければ とりつぎのもの かくとおくへつうずるにぞ



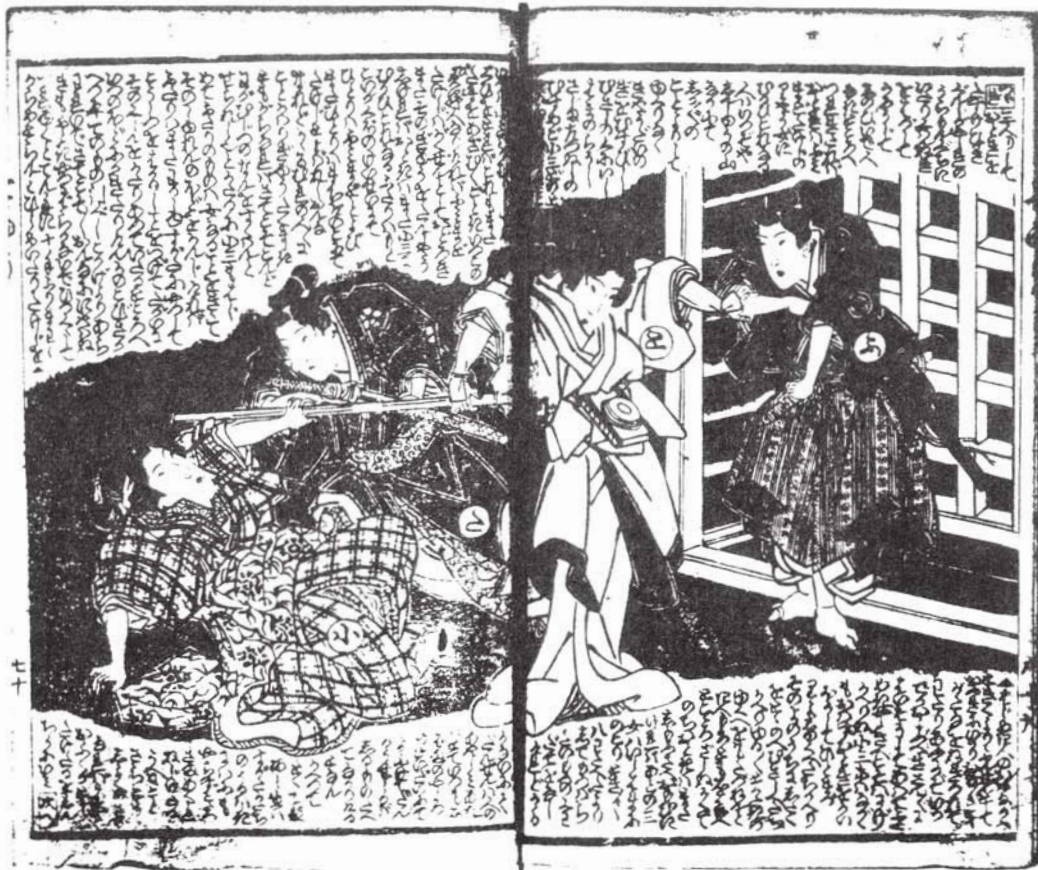


こうしつふく女はおふきによるこび さつそくおくへまねきいれて  
 みすびやうぶのかげよりこれを見るに ふたりがていたらくゑにうつ  
 せしげんじなりひらもおよばぬびせうねんにて なかく梅の承がた  
 ぐひにあらねば まづこゝろみにおどりをおどらするに これまたひ  
 なにはめづらしきまひぶりにうつゝをぬかし おんなどはつゆしらず  
 そばちかくまねきよせて さけをのまするに ふたりはしすました  
 りとさまゝたわむれごとなどいひてさけをすゝむるに おふきはふ  
 みまだたけじをまことのおとことこゝろへ さゆふにひきつけてさけ  
 をすごし ぜんごもしらずねいりけるに ふたりはじぶんはよしと  
 めくばせしてつぎのまへさがり いとりゝしくしたくして かのおと  
 きをいれおきたるひとやのほとりへしのびゆく ころははや ㄨ ㄨ  
 しんかうにおよびたれば ひつそとしてしるものたへてなかりける  
 ○ さるほどにふたりはかのひとやのそとにたゝずみいかに  
 してしのびいらんとしばしたためらひしに ㄨ ㄨ うちよりひとやの  
 かべをめりゝとこはし おどきをこわきにひんだかへたちいづるも  
 のあり ふたりはかくとみるよりさゆふよりせまりておどきをうばゝ  
 んとするに かのくせものはやらじとさゝへ しばしいどみたゝかひ  
 しが このときつきは雲にかくれ もうろうとしてたがい人かほも  
 わからざりしが しばらくいどむうちにくもはれて 四人ははじめて  
 かほをみあはせければ たがいにおどろきしが おときはこゑかけ  
 ふみまどぬし竹次ぬし かならずりやうじし給ふな このひとはわれ  
 をたすけんとするもの也と きいてふたりは手をとゞめ とかくのも  
 んどうにもおよばず まづ

次へ

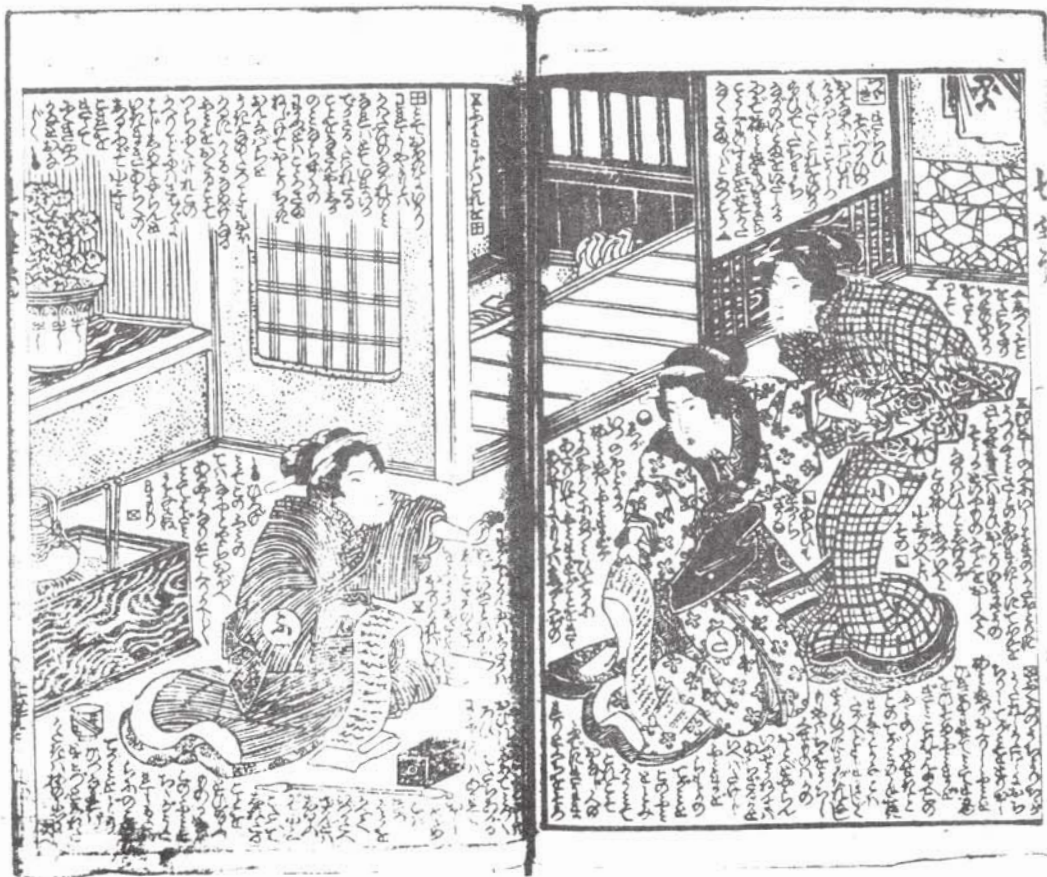
へ六十九丁裏・七十丁表

つゞき 三人りしておどきをたすけひき ぐんじがやしきのうらもん



ぐちにいたり くはんぬきをはずしてかろうじてしのびいで 人なき  
 ところへつれきたれば おときはふみまだたけじのりやう女にむかひ  
 これなる人はいつぞやんしゆうの山なかにてしかく のことより  
 してゆくりなくきやうだいのきをむすびし むさしのくにいしはまの  
 らうしきしま左門ぬしのむすめこ小三どのといふ勇婦なりといへば  
 小三はかむりしてぬぐひをとれば これもまたたまをあざむくとき  
 いつこの美婦人なりければ ふみまだたけじはがくぜんとしておどろ  
 き またそのぎゆうをたんしやうしければ おときはまた小三にむか  
 ひ これなるふたりはもとこいがくほのけいせいにて ひとりふみ  
 までとよび またひとりまちはまちげいにてたけじとよばれしおんなな  
 れど かゝるむれの人ゝにことかはり ぎゆうたくましきともがら  
 なれば さてこそこんどわがむじつのなんをすくはんとせられし也と  
 かたるに 小三もはじめてふたりのものは女なることをきゝて その  
 しゆれんのほどをかんじければ ふたりはまたわかしゆすがたにやつ  
 して こうしつをはかりしことをつけて たがいにくしんをかた  
 りあふていたるところへ 一つのほどにかきたりけん かのこびさか  
 へつ平てのもの引ぐし こかげよりあらわれいで さてこそ おん  
 なにやはぬきもふときやつばらかな いでひつくゝしてつれゆく  
 てん手に十手ふりまわし からめとらんとひしめいたり たけじを  
 ▲ はじめ四人のおふな かくときよりふんぜんとしておふ  
 きにいきなり おのゝこしがたなをぬきつれて わたりあふにぞいか  
 でおおふべき さんぐにはいそうして あはてふためきやしきへ  
 こそはにげかへりぬ 小三等はながくもおはず おときをかいほうし  
 て ひとまづりよしゆくへたちかへり そののうちにしたくをと  
 のへ むさしへたちかへりゆるゝとかたきのゆくへをもたづねんと  
 四人もろとも石はまへとこゝろざしぬ かくてのちおときはまたし





もふさへおもむきければ あとの三女はいしはまにのこり ときどく  
 八はたへたよりして もつばらたいもふのくわだてをなしけれど か  
 るみつしをかないにてだんせんは人のあやしみあれはとて いつも  
 石ばまのやしろのけいだいにて よふけてだんかうせしかば しるち  
 のたへてなかりけるとなん かへつてとく乙部梅之承はすがたかたち  
 のうるはしきにはにもやらず こゝろさまあく迄ねじけたるうへにこ  
 とさらこうしよくのさがなれば はやおふくがとしたけたるをしんち  
 うにいま 次へ

へ七十丁裏・七十一丁表

つゞき きらひそばつかひのおんなにたはむれけるほどに こうしつ  
 もいたくこれをいかり給ひて たちまちながのいとまをいだしけるに  
 ぞ 梅之承もいまさらこうくわいすれどせんかたなく さまぐとあ  
 つこう ▲ しつゝそこをたちさり ちとのゆかりをたよりて ★  
 ✕ むさしのくにいしはまのかたほとりにうつりすみ さとのあげ  
 まきらにてほんをとらせ またはまひおどりいまやうのさうかといふ  
 ものなどをおしへて なりはひとしけるが この梅之承がいへと小三  
 がいへとは その ■ あはひもとふからざり ○ ○ しが  
 一つのほどにか梅之承はふみまどがよふしよくなづみ ひそかにあ  
 たりにてふみまどがことをきゝあはせしに もとは恋がくぼのゆうく  
 んなるよしをきゝて しからばわがくどかんにはしたかはめといふこ  
 とはあらじと こゝろのたけをふみにしたゝめおくりければ ✕ ✕  
 ふみまどはこれを 田 田 みておほきにいきり われよしやもと  
 はかたけのながれのみなればとて いまいかでかさるたはれたるこ  
 とをなさんや しかのみならず かのわかふどはこゝろさまねじけて  
 ほとりちかきおんなばらとうきななたつこともおほかるに かゝる



なめげなるふみをおくるこそつらくにけれ このかへりごとにはさん  
 々にはじしめてやらんといきまきあらくのしるにぞ 小三もこれ  
 をきゝて にくきやつかなどおなじく ひろげみて このふ  
 みのてはなにとやらおぼへあるやうなりとて くりかへしくみて  
 はだみはなさぬまもり ☒ ☒ ふくろのうちより ちゝがうたれし  
 かたはらにおちちりしてがみをとり出し 梅之承がおくりしふみとひ  
 きあわせてみてまゆをひそめ ふみまどぎみこれ見給へ このふみの  
 しゆせきとこのてがみの手せき まなとかなとはたがへども まさし  
 くどうひつにまぎれなし もしやはちゝをうちしくせものはかのおと  
 べとやらんいふせうねんにはあらざるかといへば たけじふみまどら  
 もかのてがみとこのふみと とみかうみて これこそおなじ人のふで  
 にきわまれりとくちをそろへてのぶるにぞ 小三はおび引しめてみづ  
 くろひしてたちあがるに ふたりはあわておしとめ こはきつそう  
 をかへて いづかたへゆかんとはし給ふぞ 小三こたへて しれたる  
 ことをとひ給ふものかな このふみをちゝがうたれしかたはらにのこ  
 りしてがみとどうひつなれば とわづとしたかたきは梅の承に

〔次〕

へ七十一丁裏・七十二丁表

つゞき きはまれり ちゝのあだにはとてんをいたゞかずとこそ  
 きけり しれざるさきはともあれ かたきのしれしうへからは い  
 がかゆふよのなるべきぞと かけいださんとするていに たけじはむ  
 かふへたちふさがり そはもつとものことながら よにはにた手もあ  
 るものなるに はやりてもしやそでなきときはそこつなりとわらはる  
 べし よくゝたゞせしそのうへにていよく かたきにきわまらば  
 われゝも もろともにちからをそへてほんもふをとげさすべけれど

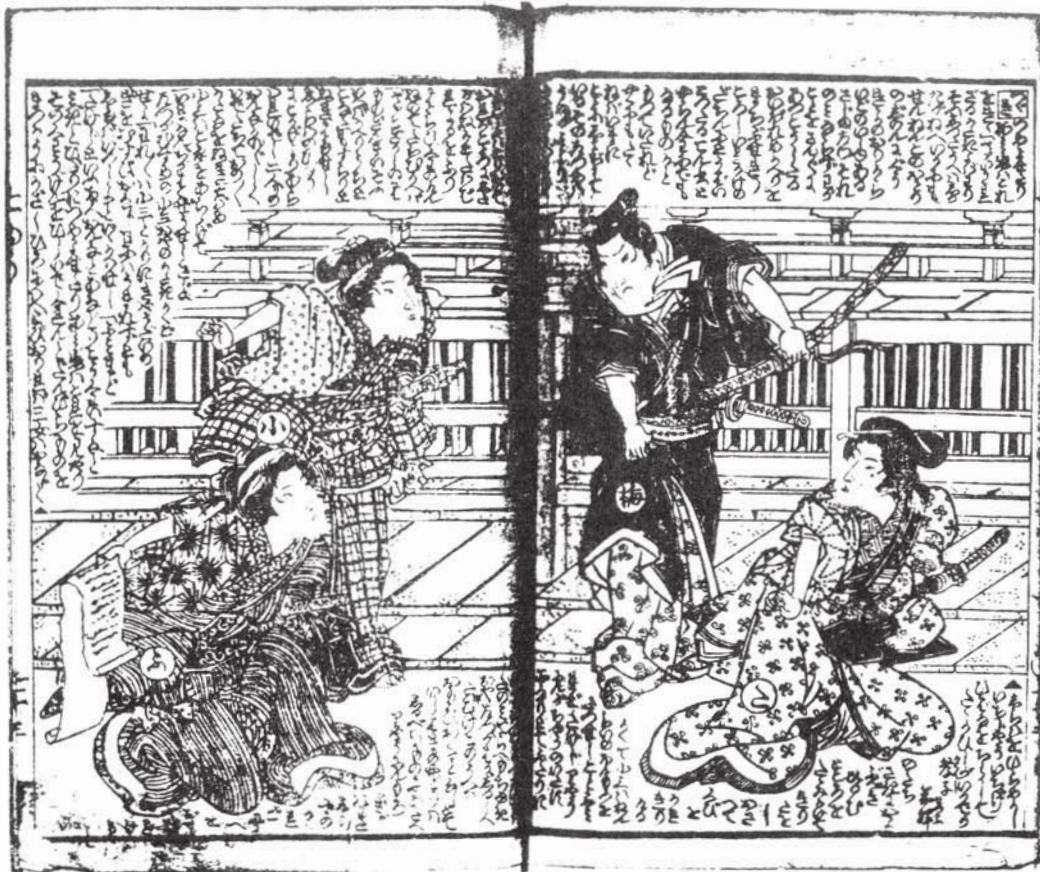


はやらばあやまつことあるべし たんりよこうをなさずといふをし  
らぬおんみにあらねども こゝろがせくまゝかけいださんとははなは  
だもつてそこつなりと きいて小三はふたりにむかひ あやまつたり  
おふたりさま しからばいかゞしてそのじつぶをたゞすべきやといへ  
ば たけじはしばしかんがへて ふたりがみゝにくちをよせて その  
きみつをさゝやきけるにぞ ふたりももつととどふじ やがてその  
はかりごとにしたがひ ふみまどはまづゑんじよのかへりことをした  
ためておくりければ 梅之承はかゝるたくみごとゝはつゆしらずと  
る ▲ ▲ 手もおそしとひらきみるに こゝろざしのほどうれしき  
よしをかきて うちにはゑんりよがちなることもおふければ それの  
よはいしはまのやしろへもふづるなれば そのみぎりゆるゝとあい  
まいらせて せつなるみこゝろのれいをもふべしと みづぐきのあ  
とうつくしく なさけもこもるぶんていに もとよりきりやうちまん  
なる梅之承 十五の巻へつゞく

十四よりつゞき すこしもうたがはず その夜をばまちにけ  
る かくてやくそくのよにもなりしかば ゆふくれより梅之承はきよ  
らかなるいせうをきかへ たゞひとりいしはまへぞおもむきぬ かく  
て梅之承はみやしろのはいでんへちかつきてみるに はやふみまどは  
さきへきたりてらんかんにもたれて ひとまちがほにいたりしが  
それとみるよりこゑかけて こいびとなにとおそくはき給ひしと  
いわれて梅之承はむねとゞろくばかりにて ふみまどがそばちかくよ  
りて そのあさからぬこゝろざしのほどをよろこびきこへ すでにて  
をとりてたはむれんとするに ふみまどいわく おんみはおちこちの  
たをやめとうきなたちてひくてあまたのきみなれば またわらはをも  
ほんのいちじのたはむれにし給ふことあらんには みこゝろにしたが  
はじ じつしんもつてわらはをおもひ給ふとならば かいらうどうけ

つのかたらひをいたしむふさんと じやうをふくんでいひければ さ  
すがの梅之承もたましひをてんぐわいとばしゑゝるがごとくにて  
てのまひあしのふみどころをおぼへず いかでかおんみをすてゝあだ  
しおんなにちぎることあらんや このゝちふつゝうわきらしきこと  
をばやむるなりといへば ふみまどはかしらをうちふりて いなく  
それはわらはをいつはり給ふなるべし すでにおんみこのほとりにふ  
かくいひかはせしおんなありて かたききしやうをおくりたまひしな  
らずやといへば 梅之承はもとよりおぼへなき ▲ ▲ ことなれば  
つやゝこゝろへぬおもゝちに ちにて まゆをひそめ われちかきころ  
こゝへきたりて いまだふかしきちかつきの人さへなきに なんのい  
とまありてかさやうなることのあらんや それはまつたく人たがへな  
るべし おんみなにしてまたそれをよくしりてかくはのたもふにや  
いづくいかなるおんななるや せうこあらばみせ給へと とはれて  
ふみまどくわいちうより いつゝうのしよかんをとりいだし これこ  
そおんみがしゆせきにいてひかはしたまひしおんなにおくられしきせ  
うならずやとわたせば とつておしひらき とつくりみてびつくりし  
「コリヤこのてがみがどふしてこゝにとひきさきすてんづけぶれを  
みて ふみまどちやつとうばいとり 「なんとふかふいゝかわしたか  
たいきせうであろふがや 「いかにも 「しかもそのよはあまあがり  
うしみつすぐるころなるべし なんのいしゆやらいこんやら いご  
のかへりをまぢふせして ひきやうみれんにやみうちに 「ヤ 「サ  
アうたれし人はこのほとりの しかもそのなはさじま左門 いへにつ  
たわるでん書のいちくはん うばひとつてたちのきし そのばにのこ  
りしこのかきもの あてなはなけれどまさしくせうこと だいじにも  
ちしこのてがみは きせうがはりのかたきのせうこ サアこれほどか  
たいやくそくしたおんなのあるにまたわしをなぶらしやんすはたうざ





のはな マアよしにしてじんぜうに なのつてうたれてしまひなさん  
せと かくしもつたるくわいけんをぬき そばめてぞ 次へ

へ七十二丁裏・七十三丁表

つゞき つめよせたり 梅之承はこれをき、「ヤアいわれざるかたき  
よばわり そふしつたうへはしかたがねへ いかにもせんねんこのほ  
とりのじいんにぐうきよのおりから いごのいしゆあるさじま左門  
それのみならずわがことをさんぐにあつこうしたるおいぼれめ か  
へりをまちふせきりころし いきかけのだちんにとぅばいとつたるて  
ん書とやらん 金にでもなるものかともつていたれどやくにもたゝね  
ば いまにこゝにしようじている その左門めはうぬがみより かた  
きよばわりしやらくさい そんなことはとりおいておれがこゝろにし  
たがはめかと たはむれよるをふりはひくわいけんぬいてたちむか  
へば 「ヤアこざかしいはものさんまい そふいへばかへりうちと  
こなたもすらりとぬきはなせししらはのひかりに こかげよりあらは  
れいでし二人りのおんな かいぐしくいでたちて おのゝかたな  
をぬきそばめ 小三はこゑをあらゝげて 「いまなんぢがはくぜうせ  
しさじま左門がむすめの小三 おやのかたきかくごせよ 「われゝ  
は小三とかりにきやうだいのぎをむすび おなじ日にはうまれずとも  
しなばいつしよといゝかはせし

「ふみまど 「たけじといふ兩人 おんなとあなどりこうくわいす  
など みぎとひだりにつめよせたり 梅之承はこれを見やり そのく  
わうげんをひしいでくれんと だんびらものをまつかうにかざし ひ  
ろにはへとびおれば 三女はおなじく ▲ しらはをひらめか  
し いちじやういちげひばなをちらしてたゝかひしが いかでか孝子  
節婦のたちさきにおよぶべき ひるむところをたゝみかけてきりたを



し おさへてくびをかききりける かくて小三はねんらいのほんもふ  
をたつせしこと ふみまどたけじりやうにんがちゆうのいたす所なり  
とて ふたりにあつくれいをのべ くびをばたのみてらへもちゆき  
おや左門がはかじるしへたむけ このうへはおもひおくことなしとて  
いしはまのやどりはしるべのものにあたへ りやうにんもろとも八  
わたしらずのかくれごしよへとおもむきける

へ七十三丁裏・七十四丁表

○かくてたけじふみまどのふたりは 小三を八わたしらずへともなひ  
たきひめにめみへさし れんばんのかずにくはへ しばらくこゝに  
とゞまり きみつをだんかうしけるが かくてあらんはあきなしと  
またたけじふみまど小三は さんにんながらわかしゆのすがたにい  
たち ▲ ▲ おのゝわらづとのなかにひとこしをかくし またか  
まくらへいで それよりいつのくにへわたりぬ ✕ ✕ はなしふた  
つにわかる こゝに伊豆の国天城山のふもとなるむらにひとりのかう  
ふあり 富屋久平とよびて たゞひとりのむすめをもてり これがな  
をおふきとてめめかたちうるはしく ひなにはまれなるうまれつきと  
みな人ほめざるはなし ことしすでに三五のはるをむかへ ✕ ✕  
ければ ふぼはたゞたなぞこのたまといつくしみ あらきかせにも  
あてずそだてけるが いかなることにやこのはるより何となく ✕  
✕ こゝちあしくとてうちふしけるが しだいによはりゆくていに  
ちゝはゝは心も心ならずさまゝいかなやうてをつくすといへども つ  
ゆばかりもそのしるしなきこそ ことはりなれ このおふきがやまひ  
のこんぼんはおなじさとなる風月や才兵へといふものゝせがれ才次郎  
といふびせうねんを おもひそめたるこひやみなれば いかでかぎば  
へんじやくがくすりもおよぶべきにあらず されどおふきはおぼこぎ





のはづかわしきがいちはいにて こゝろのうちにくよくとおもふの  
みにてそれともいわずくらしける ○こゝに又かのふげつや才兵へと  
いへるは もとはよしあるぶしのらうにんなりしかど ゆゑありてぶ  
しをやめ この山のふもとなるむらにきたり ● ● ちのかねを  
もとでとなして あきうどゝはなりつれど さすがにぶんぶのみちを  
すてず ことに ■ ■ ■ せがれ才二郎は すがたかたちみやびやか  
にして いとけなきよりぶんがくをのみこのみ ことし 次へ

へ七十四丁裏・七十五丁上表

つゞき すでに十六才にぞおよびける さてもとみやがいへには お  
ふきがびやうき たゞひとりむすめのことなれば かぢきとうさま  
のことをなしけるが さらにそのしるしなきに久平ふうふもほとんど  
こまり おふきがいとけなきときよりもりそだてしおさめといへるう  
ば いまはざいしよへひきこもりいるをよびよせて おふきがしんち  
うをとわせしに あんのごとくいつしか才二郎をみそめあこがるゝよ  
し もし才二郎に ■ ■ ■ そはれずは いきてもせんなしと おも  
ひこんだるよふすなるに うばのおさめはかくと久平ふうふにつげけ  
れば ふうふはおどろき才兵へがかたへ人をたのみてそのよしをい  
きこへければ 才兵へもせがれ才二郎はよはくしきうまれにてと  
てもぶしにならんこともおもひもよらざれば てうにんにせばやとさつ  
そくせうちなしけるほどに 両家のよろこびおふかたならず 吉日を  
ゑらみ才二郎をとみやへおくるべきことにきわまりける ○さるほど  
にやがてこんいんのとうじつにもなりしかば とみやがかたにてはう  
ばのおさめにしもべあまたをそへて ふげつやがかたへおくりければ  
ふげつやにてもかたのごとく 人々をもてなし たそがれすぐる  
ころうちをいで、才二郎はのりものにたすけのせられ あまき山のふ

もとをよぎりしに あらふしぎや いまゝではれわたりしそらにわかにかきくもり しんどうらいでんおびたゞしく おふあめしやちくをながし しせきもわからぬしんのやみとなりしかば おさめはじめしもべどもはたましひてんぐわいとばし こはいかなるへんげにやとおどろきうへをしたへと ▲ ▲ そうどうせしに いちだのくろくもたちまち才二郎がのりものうへゑまひさがるよとみへしがのりものをくうちうへまきあげ いづくともなくつれゆきし あとはあめやみくもはれて もとのせいてんとなりけるにぞ しもべどもはたゞあきれにあきれて かほみやわせていたりしが かくてあるべきにあらねば このよしをさつそくにとみやふげつやりやうけへつけしらせければ 久平才兵へとるものもとありあへず このところにつけきたるといへども さらにそのかひなく いかゞはせんと ぼうぜんとしていたりける そのとき久平は才兵へにむかひ われらおゝちのときの事なりしとかや わがいとけなきころ ちゝがものがたりしをこみゝにはさみておぼへたることあり このあまき山には山姥（やまうば）といふへんげすみて みめよきおとこをさらひゆきて かうぐをもとむるよし むかしの山うばにさらはれしげせうねんありしときけり 山うばとかいふものは 世にいふ坂田の公時（こうとき）がはゝにてさるへんげにてはあらざるべきに といふかしといへば 才兵へこれをきゝて いかに山姥（やまうば）山男（やまおとこ）などいふへんげ しんざんゆうこくにはすめるよし なかんづく山うばといふものは おんなのみにしておとこなきゆゑ おとこをみるときはさらひゆきてかうぐをもとむるといふこと 漢土（かんど）のふみにもみへたり もしやさるへんげのわがせがれをさらひゆきたらんもしるべからず こよひははやかうたけたることなれば せんすべなし あしたにいたらばそう／＼にんぶをもよふして

次へ

へ七十五丁上裏・七十五丁下表

つゞき そのやまうばをかりいだすべしと まづそのよはたちかへりぬ ○久平がむすめおふきはこのことをきゝて あるにもあられず たゞなみだにふししづみていたりければ うばおさめはいろ／＼とこれをなぐさめ たゞこのうへはしんめいぶつだのちからをかるよりほかなしとて そのつぎの日 ひごろ ▲ ▲ しんずる なぎのはのみやうじんへ ひやくどまいりして 才二郎がふじにたちかへるよふにといのりけるおりから としわかき三人のわかしゆ しかもみなひなにはまれなるうまれつきなるものども このやしろにもうで そこゝとみありくていに おさめはつくぐとみて こゝろのうちにおもふふは この人／＼もいまだ としわかきげせうねんなるに うか／＼とこゝらわたりをはいくわいせば もしや又山うばとやらんがためにさらわれんもはかりがたし これをつけしらせざらんもふしんのいたりなりと 三人がそばかくよりいふふは おんみたちはゑんごくの人とみうけ候へば 一大事のことをつけ申也 このあまき山のおくには山うばといふへんげすみて みめよきをとこをばうばひさりてかうぐをもとむるよし 見まいらするにおんみたちもいまだとしのゆかぬかたぐに候に こゝらわたりをうろつきて やまうばに

✕ ✕ さらはれ給はんことのいとおしさよと いふに三女はこれをきゝてあざわらひ 山うばといふものは かの頼光がしんかたる金時がはゝにして させるへんげのものならぬよしをばきけり いかでかかくのときよこしまのことをなさんや これまつたくぞくせつのはなはだしき也 しんずるにたらずといふに おさめは三人にむかひさやうにおもひ給ふもつともなれども げんざいわらはがつきそいまいらするきみのむこがねとさだまりし才二郎さまといふびせうねん よべこのほとりにてかの山うばかためにさらわれたり ちゝはゝ





はいふもさらなり よめぎみはあるにもあられずしなるとばかりなき  
こがれ給ふに わたくしとてもごうしやうのおりからつきそひまい  
らせしきみなれば いとおしさも一トしほにて なにとぞとりかへし  
しゆびよくこんいんととのへさせんとおもへども かゝるつうりき  
じさいなるへんげなれば なかくもつてじんりきのおよぶべきにあ  
らずと さてこそ 次へ

へ七十五丁下裏・七十六丁表

つき このなぎのはのみやうじんへあゆみをはこび候也とかたるを  
きいて 三女はめとめをみあわせ しばしことばもなかりしが なか  
に武次はおさめにむかひ この三人はしさいあつてわかしゆすがたに  
やつしおれど まことはおんな也そのわけはあとにてくわしくかたる  
べし まづそれはさしおきて もしやそのことばにたがひなくはい  
とおしきことなり おなごはあいみがいいへば なんとおふたり  
さん ちからをそへてそのわけものをたいじしよふではあるまいかと  
きいてふたりもうちよろこび なるほどこのよふにしよくある  
くもおんなにやわめ事ながら ぶへんしゆぎやうのわたしらなれば  
いかにもその ▲ 山うばのわけものをたいじするとはおもし  
ろからん これまでおんながへんげにとられ つよいおとこがたすけ  
たは くさぞうしやきやうげんにいくらもあれど そのよふなうつく  
しいおわかしゆさんが しかもおんなのわけものにさらわれたのを  
わたしがおんなのざいにうでだして とりかへそふとはおふたり  
さん よつぽどおしがつわものではござんせぬかと くちあひひう  
ちわらふにぞ ふみまど小三もうちわらひつゝ まづかのうばにみち  
びかれ ① ① とみやがいへにぞおもむきける さて三人のおん  
なはおさめもろとも富屋にいたれば ■ ■ おさめはまづあるし



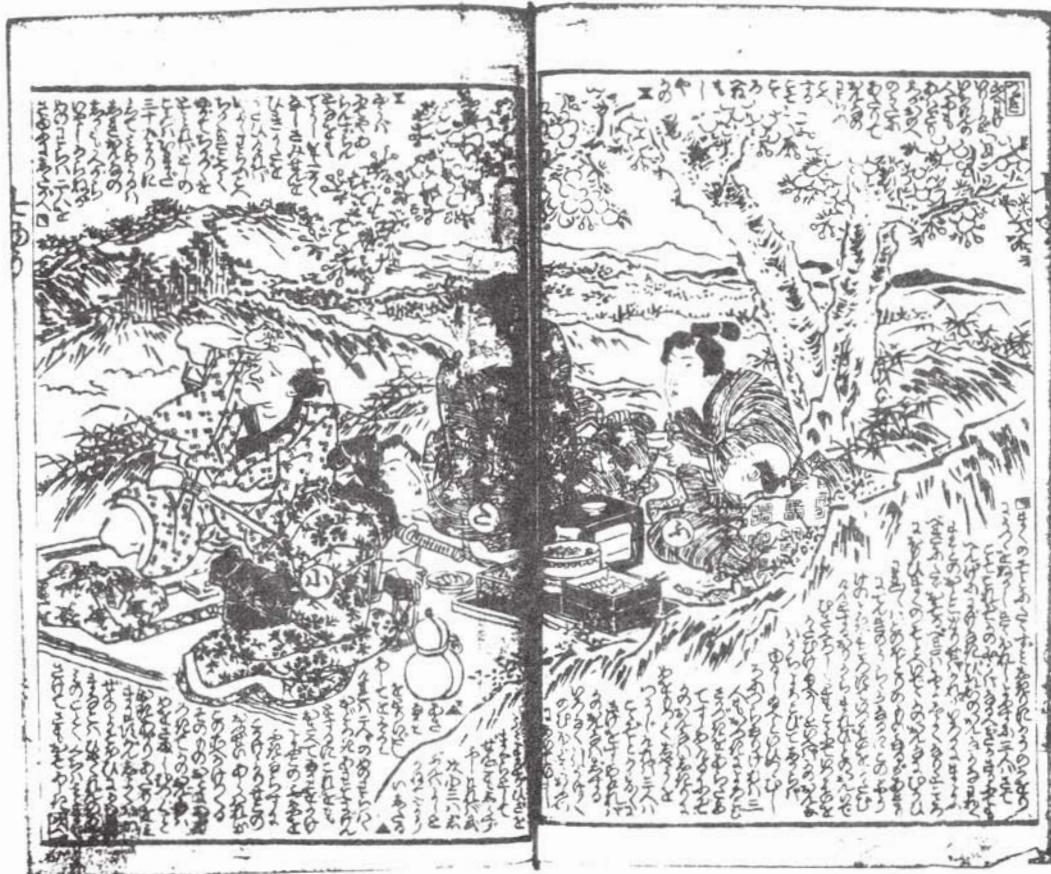
久平にむかひ むるい三人がちからをそへんといふことをものがたれば  
 久平はおふきによるこび かつそのゆうきをかんにあつくもてな  
 し 山うばのありかをしらんことをそうだんにおよびける 十六  
 ○そのとき小三は人々にむかい たとへじんつうをゑたるともいか  
 ほどのことやあるべき たゞおふせいのせをかり もよふしてあま  
 ねく山をさがしもとめんには しれぬといふことはあらじといふに  
 たけじはかうべをうちふり いなくそれはしかるべからず かのへ  
 んげはいろよきわかしゆをこのむといへば やはりわかしゆのすがた  
 にいでたち さけさかなをたづさへ山ふかくわけいりて うたをうた  
 ひさみせんをひきなんどせんには ひつじやうかの山うばかれいで、  
 そゝろにいできたらんもはかりがたし かねてせをこゝかしこの  
 こかげにふせおきて そのときいちどうにあいづをさだめあらはれい  
 で ちからをあわしてうちとらんには たいぢせずといふことはあら  
 じといふに みなくげにもつともとうじ やかて三人ともうつく  
 しくよそほひ よきさけうまきさかなをたづさへ山ふかくわけいり  
 おゝぜいのせをばかしこゝの山かげにかくしおき 三人は山ふと  
 ころのふうけいよきひらちへもうせんをしき まくを打まはし さけ  
 さかなをとりちらし さみせんをとりいだし ふみまどたけじはこゑ  
 おかしくうたひまひなどすれども これぞとおもふものもいでこず  
 三人はさいつおさへつさけくみかはし 日のくるゝまでまでくらせ  
 ど なにごともなし せんすべなきまゝに三女はかほみやわせ いか  
 らはせんと たがいひたいをつきやわせて だんかうせしかどせん  
 かたなく いゑにたちかへりそれより三日があいだまいにちくかく  
 のごとくいでたちて 山をへめぐれども さらにこれぞとおもふ





へ七十六丁裏・七十七丁表

つゞき あやしきこともなきに 三人はほとんどこまりかねてしんずるほくしんめうけんをいつしんにねんじ なにとぞ才二郎のありかをしらしめ給へと たんせいをこらし ▲ ▲ いのりけるに そのよたけしがゆめのうちにいちにんのどうじあらはれいで よきかなくなんちら三人はほと七せいのかしんなるがゆゑに ✕ ✕ われかけみにつきそひてまもるなり しかるにこのたびなんち三人へんげをたいじして才二郎を ■ ■ すくはんとする じんしんかんづるにあまりあれば われひとつのめいかうをさづくるなり あしたはしかくゝの所へゆきて いつものごとくゑんせきをもふけ しゆゑんをもふし さみせんをひき うたをうたひなどするかたはらにて このめいかうをくゆらすときは かならずかのへんげそのかうきをきくときは ■ ▲ かならずそのところへいできたり うつゝをぬかすものなり そのときさけをすゝめてのましめなば 山うばよろこんでおほくすごしのむべし ゑゝるをまちゑてうたにはたいじせんことこゝろのまゝなるべしとおしへ ひとつゝみのめいかうをあたへたちさり給ふとおもへば ゆめはさめつ 武次はきいのおもひをなしまくらべをみれば めうけんぼさつのさづけ給ひしめいかうありければ さてはまさゆめにてありけりとて あくるをまちて兩人にこのよしをかたるに 兩人もゆめのしだいをかたり たがいになふしぎのおもひにて いまにはじめぬれいげんをかんじ あるじふうふにしかくのよしをかたり つぐの日はわけてよそほひさけさかないろく たづさへて めうけんのおしへ給ひし所へいたり れいのごとくもうせんをしき しゆゑんをもふけ さみせんをひきうたをうたひなどするかたはらにてかのめいかうをくゆらしけるに そのけむりふんくゝいくゝとしてなかぞらへたなびきしが しばらくありてみねのかたに



あたりて おんなのわらひさゞめくこゑはるかにきこゆるにぞ 三人  
はめとめをみやわせ この三四日まいにち 次へ

へ七十七丁裏・七十八丁表

つゞき 山へわけいりしかど いちにんの人にもあはざりしが おの

へのかたにあたりておんなのわらふこへするこそ こゝろへね もし

やかの ✕ 山うばにてやあらんずらんと なをもてうしをたか

くなし さみせんをひき うたをうたひければ いや／＼わらふこへ

ちかくきこへて やがてちかつくをとみれば としのころはいまだ三

十ばかりにして みめうるはしきおんなの しかも人がらいやしから

ぬがめのわらは二人をさゆふにしたがへ ■ まくのそとにたゝ

ずみ しきりにかうのかをりにうつゝをぬかし きゝほれしよふずに

三人はさてこそこれぞかの山うばなるへきか さるにてもへんげに

にげなきびれいのおんなかな われ／＼まことのおとこなりせば か

れがいろかにまよふべきに たゞおそるべきはによしよくなりとこゝ

ろにおもひ まくのそとへいでゝかのおんなにむかひ われ／＼はこ

のほとりのものなるが あまりにてんきのうらゝかなるに このふう

けいよきとこにて いっぱいをかたむけんとするおりから まれば

とのおんいで むさくろしくともこゝにていっぱいをかたむけ給へか

しといへば かのおんなはうちよろこびて しからばゆるし給へとい

ひつゝ むしろにつらなりければ 三人もおふきによろこび さかつ

きをあらためてすゝめけるにぞ かのおんなはしきりにめをもつて

じやうをつうじければ 三人はこゝぞとかわる／＼にさけをすゝめけ

れば かのおんなはじするいろなく引うけ／＼のむほどに おふいに

めいていし ふみまどがひぎをまくらとしてぜんごもしらずふしけれ

ば 武次小三はじふんはよしと かねてよいしたる ▲ ▲ あさ





なわをとりだし あしてをくゝりければ 二人りのめのわらは、お  
 どろきあわて にげんとするに これをもおさへてなわをかけ よふ  
 このふ糸をふきならすに こかけよりせこのおふぜいあらはれ出 こ  
 の所へかけつくる そのものおとにおどろきてかのおんなはめをさま  
 し むつくとおきあがり あたりをみまわすがんしよくは いぜんの  
 よそほひにかはり まなこはひやくれんのかゞみのことく くちはみ  
 までさけてさもおそろしき 次へ

へ七十八丁裏・七十九丁表

つゞき かんばせにて とびかゝらんとしけれど あさなわをもつて  
 つながれしことなればかなはず みをもちゆるを 三人のおんなはひ  
 としくかたなをぬいてずんぐにきりころすにはがみをなし ほゆる  
 こへこたまにひゞきて おそろしなんといふもおろかなり かくてか  
 のめのわらはとみへしをよく見れば これにんげんならず この  
 山おくの山でらのふどうめうわうのかたはらにたちし せいたかどう  
 じこんがうどうじの いとふりてめはなもかけそんじたるなり 人  
 はこのていを見て さてはこのへんげがつうりきにてかゝるもくぞう  
 を人とみせてはたらかせしなりけり かゝるつうりきじざいのばけも  
 のをなんなくたいおせしは こよなきでがらなりと したを ▲  
 ふるひておそれあへぬかくてふみまどは人ゝにむかひ このへん  
 げをのへのかたよりきたりたれば そのあしあとをたづねゆかば か  
 れがすめるところのしれずといふことはあらじ すべてかやうのへん  
 げ すがたはいろゝにかわるとも あしあととはかくすことのならざ  
 るものなりといふに みなくもつともとそれよりだんゝあしあと  
 をつたへてゆくに げにもふみまどがことばにたがはず きこりしば  
 びともかやめみちに あやしげなるあしあとみゆるをつたへゆくに



すじつてうにして一ツのほらあなあり このほらのくちにてあしあ  
ととゞまれば 三人は 人々をみかへり このほらこそき  
わめてかのへんげがすめるところならんといふに 大せいのせこのう  
ちよりいちにんのかりうどすゝみいでゝいふよう われらとしごろこ  
の山へのぼりてしゝるをうつて なりわひとしつれども つひにか  
ゝるがんとあることをしらず いといふかしきことなり ときとし  
てはこのへんをもとふりしことありしかど たゞきりふかくてほらの  
くちをふさぎしに けふはきりはれてほらのくちあきらかにわかるも  
いといふかし これまつたくへんげをたいじしたるゆゑなるべしと  
いふに 三人はさもあるべしとて それよりよいのたいまつをとも  
して ほらのうちへすゝみいるに あるひはたかくあるひはひきく  
またはみぞかはをわたりなどして またゆくこと十丁よにして すこ  
しいらか なるところにいづるに こゝにいわをきりひら  
きて 門のごとくせし かたはらにこれも山でらよりやとりきたりけ  
ん 金がうじんのてあしもくちそんじたるが 門ばんめきてたり  
ふみまど又人々をかへりみて これみ給へ この金がうじんも  
きへ

へ七十九丁裏・八十丁表

つゞき さだめしつうりきにて これまでにんげんとみせてはたらか  
せしものなるべしと そこをもすぎてなをおくのかたへゆけば かう  
らいべりのたゞみのくちそんじたるをしき みすのちぎれたるをかけ  
ふりたるきやうづくへなんとなをしおき 又はどらにやふはちぶつ  
ぐのたぐひへ うさぎさるなんどのにくをもりたり これ山うばがつ  
ねのしよくもつとみゆるに いや おどろきまたかたへのほらのう  
ちをみるに としわかきをとこのみなかほかたちのあほざめたるが



十人ばかりぼうぜんとしていたり このうちをみれば かの才二郎も  
いたりければ 風月屋の人くはしゝたる人のよみがへりしごとくお  
ぼへて よろこぶことかぎりなし かくて三人はいさいのことをもの  
がたり かの人くをともしなひ ほらをいでゝ人くにしつして  
ほらへあまたのやけくさいをいれ これに火をかけてやきはらひさて才  
二郎にとふに才二郎はたゞゆめのこゝちにて けつこうなるごてんに  
ともなはれやんごとなきじやうろうにみやづかひしとおもひしといふ  
に これ山うばといふへんげなり そのしやうだいをみせ申さんとて  
もとの所にたちかへり 山うばのしがいをみするに したをまひて  
おそれけり かくて人くははこのばけものがしがいをもちきはらはん  
といふに ふみまどはしばしとおしとめ わらはつたへきゝしことあり  
山うばといふものゝ腰間（ようかん）には 佩（はい）といふもの  
のあり これ玉のたぐひにしてよにまねなるたからなる よしもろこ  
しのふみにみへたり もしやたがはずしてそのはいといふものあらば  
ながくよのたからとなることもあるべし こゝろみにこしのまわり  
のにくをさきてみんといふに 才二郎もこれをきゝて なるほどその  
はいといふものゝことはわれもきけり まづゑとりにめいじてこしのま  
まはりをさがしみるべしとて さつそくゑとりにめいじてこしのまは  
りのにくをさきてみるに あんにたがはずひとつのまろきものあり  
よくくにくをとりてみるに まがふかたなき玉なりければ おふき  
によろこび 玉すりにめいじてみがせけるに 夜（や）くわうの玉  
ともいひつべき名玉となりければ よろこびにたへず かの山うばが  
しがいをばやきはらひ そのこつをばあまき山にうつめごにちにたゝ  
りあらんことをおそれて そのうへに

次へ

へ八十丁裏

つゞき ひとつのほこらをきづき 姥（うば）のやしろとよびぬ ま  
たこうせいかの山うばがすみしほらをば うばがほらとよびなしける  
かくて風月屋富屋がよろこびたぐへんにものなく さつそく ▲  
▲ 吉日をゑらみてこんいんをとりむすび めでたく三々九度のさか  
づきをなしければ おふきはのぞみのごとく才二郎とふうふになり  
よろこぶことかぎりなし これといふもまつたくふみまどたけじ小三  
のさんになの勇婦がいさおしなりとて 両家より三人にはきんぐあ  
またをおくり あつくもてなしとゞめけれども もとより三人はひさ  
しくひとつとところにとゞまるべきにあらねば 両家の人くへいとま  
ごひしてたちいづるに またく両家よりははなむけにさまぐのもの  
をおくりなどしてなごりをおしみける かの山うばのようかんより  
いでし玉はごにちにもちゆること ✕ ✕ あるべしとて ふみまど  
はこれをくわいちななし いづのくにをほつそくしける これよりの  
ち この玉につきてさまぐのものがたりなをのこれる 勇婦の伝記  
は編をかへ巻をついてとくべきになん まづはこれにてふでをさしお  
く めでたしくくくくくく

#### へ広告

文政十稔丁亥春新鵜稗史目

牽牛織女願糸竹 全六冊 曲亭馬琴作 五渡亭国貞画

代夜待白女辻占 全六冊 曲亭馬琴作 歌川国貞画

繫馬七勇婦伝 三編 全六冊 南仙笑楚満人作 漢齋英泉画

初編二編とも製本仕候 御もとめ御高覧可被下候

天人於七を織女に準返すく丸に文月 全六冊 柳亭種彦作 五

渡亭国貞画

正本製九編 おそめ久松狂言大切迄 全六冊 柳亭種彦作 国貞画



正本製十編来子の春出版仕候  
 花角力恋の百草 全六冊 志摩山人作 歌川国信画  
 手鞠唄幼稚絵説 全六冊 楚満人作 春斎英笑画  
 笑話のはやし 袋人全一冊 林屋正蔵作 歌川豊国画  
 団扇地紙錦絵 新模様年々出版  
 江戸馬喰町二丁目角 永寿堂西村屋与八 每都悉く出版仕候  
 御かほのくすり 仙女香坂本氏製 取次仕候  
 雲論紳心の種本 全六冊 十返舎一九作 春斎英笑画  
 今昔虚実録 全六冊 桜川慈悲成作 歌川豊国画



## 2、考察

### a、『繫馬七勇婦伝』と『南総里見八犬伝』

『繫馬七勇婦伝』（以下、『七勇婦伝』と表記）と『南総里見八犬伝』（以下、『八犬伝』と表記）の関係については、今までの翻字と考察でも繰り返し述べてきた。話の展開に明確な類似は見出しにくい。趣向や設定といった、話の要素に共通するものがある。今回掲載した三編後半についても同様のことが言える。そこで『七勇婦伝』三編後半の梗概を述べながら、『八犬伝』のそれに対応する部分を以下に述べ、さらに※以下で類似点を指摘してみたい。

①武次・文窓の二勇婦はみちのくへのがれた後、鎌倉へ帰ろうとして宇都宮まで来た折、二荒山の盗賊が捕らえられるのを見る。翌日その盗賊を確認すると、砧の音木であった。二人は用の後室が美童を好むことを利用し、若衆姿になり、舞の指南と名乗って屋敷へはいる。

↓女田楽の旦那開野は、犬田小文吾に自分の身の上を語った。実は男であるが、親の敵馬加常武に近付くため、女田楽の一座に加わっていたのだった（第六輯巻之四第五十七回）。

※『七勇婦伝』は女性の男装、『八犬伝』は男性の女装で、それぞれ好色な性質を持つ相手に近づく点。

②後室お富久を盛りつぶした二人は音木がとらわれている建物へ近づく。すると内側から壁をこわし、音木を脇にかかえた者がいた。ひとまず屋敷を逃れ、音木は新たな勇婦小三を二人に紹介する。

↓該当する『八犬伝』の記述なし。

③小三の家のある石浜へ行った四人のうち、音木は再び下総へ向かったが、あとの三人は時折八幡と連絡をとりながらとどまっていた。乙部梅之丞は側仕えの女との不義を後室に知られ、暇を出されたが、石浜に移り住んで舞・踊り・早歌などを教えて暮らしていた。梅之丞は文窓を見初め、恋文を送る。小三は梅之丞の手跡が、父が討たれた折に側に落ちていた手紙の手跡と同じであることに気付く。彼が父の敵と知る。文窓は梅之丞に返事を書いて石浜の社頭に呼びだし、小三の父を殺したことを確認したうえで残る二人も加わり、三人がかりで斬り倒して首をとった。

↓馬加常武の屋敷は石浜にあった。犬坂毛野は女田楽旦那開野となって屋敷へはいり、馬加一家を殺して親の敵討ちをした（第六輯巻之四第五十七回）。

※石浜という地名の共通。またその地で親の敵討ちが行われること。

④石浜の家をひきはらい、八幡しらずで瀧姫との対面を終えた後、三人は若衆姿になって伊豆へ向かった。天城山の麓に住む富屋久平の娘おふきは、浪人風月屋才兵衛の息子才次郎を見初めて恋に落ち、両家も異存無く、婚儀の日を迎えた。しかし才次郎の乗り物が天城山のふもとにさしかかった時、黒雲があらわれて乗り物を巻き上げ、いずこへか連れ去った。天城山には山姥が住んでおり、男をさらうという噂があった。おふきの乳母おさめは才次郎が無事に帰るように、椰の葉明神に百度参りをしていたが、そこで三人の若衆に出会う。三人は武次・文窓・小三であった。三人は才次郎救出をかって出た。三人は若衆姿で山へ入り、歌舞音曲の宴をひらいて山姥をおびき出そうとしたが、うまくいかない。北辰妙見を一心に祈ったその夜の夢に童子があ

らわれ、名香をさすけた。翌日この香をたいて宴を開いていると、三十才ほどの女が、女童を二人連れてあらわれた。女に酒をすすめて眠らせ、しばらくあげると、ほどなく正体をあらわしたので、これを討ち取った。あしあとをたどって古い山寺にたどりつくと、十人ほどの若衆がとらえられており、才次郎もその中にいた。山姥の死骸を焼き払おうとすると、文窓が山姥の腰には佩という宝玉があると言う。腰のまわりをさぐると、玉が出てきた。両家より様々にもてなされた後、玉は文窓が持ち、三勇婦は旅立った。

↓犬飼現八は下野庚申山のふもとで、茶店の爺から行方不明者が多いことと、赤岩一角・船虫夫婦が息子の角太郎・雛衣夫婦の財産を奪い取ったことをきく。山にはいった現八は、胎内くぐりの入り口で妖怪を見、矢で妖怪の左目を射貫いた。さらに奥へ進むと赤岩一角の魂魄がおり、現在の一角は化け野猫がなりかかったものであると告げる。魂魄は現八に角太郎を助け、仇討ちをさせて欲しいと頼んで短刀と觸體を託した。夜が明けて角太郎の庵を尋ねた現八は、無言の行を行い、雛衣を受け入れぬ角太郎を見る。行の解けた角太郎は現八を呼び入れ、犬を氏とするつながりをきいて納得し、自分も瑞玉を持っていたが、ある日雛衣があやまって飲んでしまい、それ以来懷妊状態が続いていることを告げる。そこへ船虫が来て父一角の怪我を告げ、善行を積むため雛衣を許して家に置いてほしいとたのみ、帰っていった。現八は赤岩夫婦の真意を確かめるため、武者修行を名乗って一角の家へ赴き、手合わせをした後、一泊することになった。この日赤岩家をおとずれた籠山逸東太が、鑑定のため村雨丸を持参していたが、それが消え失せるという事件がおこっていた。一同はこの罪を現八になすりつけるつもりであった。一方現八は、守袋の玉が砕けるような音をたてたためいぶかしく思っていたが、密かに部屋を出て庭に潜んでいた。ま

なく現八の探索がはじまり、追手をけ散らして角太郎の庵へ逃げ込む。現八を追ってきた赤岩一角一家の人々は、一角の傷薬のため雛衣の胎児を要求する。覚悟を決めた雛衣が刀を胸下に突き立てると、その傷口から玉が飛びだして一角の胸を打ち抜いた。船虫らが騒ぐ中、現八の手裏剣が牙二郎の胸を刺した。さらに現八は角太郎の腕を傷付け、その血潮を庚申山中で託された觸體に注ぎかけた。血潮が觸體に吸い込まれるのを確認すると、現八は自分が庚申山中で知ったこと、現在の一角がにせものであることを語り、父の形見の品を渡した（第六輯卷之五第五十九回より第七輯卷之二第六十五回）。

※山中に害をなす化物が住む点（『七勇婦伝』の天城山の山姥・「八犬伝」の庚申山の化け猫）、その化け物に苦しめられる男女がいる点（『七勇婦伝』のおふきと才次郎・「八犬伝」の雛衣と角太郎）、宝玉が出てくる点（『七勇婦伝』の山姥の佩・「八犬伝」の雛衣の腹中の玉）が共通している。

以上のような趣向や設定の共通点がみられる。しかし話の展開上の都合からか、『七勇婦伝』の方が、『八犬伝』よりも、勧善懲悪の意図が強くあらわれているように思われる。『七勇婦伝』の乙部梅之丞は三勇婦に討ち果たされるが、『八犬伝』の船虫は生き延びてこれ以降も八犬士を苦しめる。また『七勇婦伝』のおふきと才次郎の二人はめでたく結ばれるが、『八犬伝』の雛衣は悪計の犠牲となって死に、角太郎とは結ばれなかった。『八犬伝』では八犬士の活躍の陰に、多くの善良な犠牲者がおり、またしぶとく生き延びる悪人がいて、作品世界に複雑な陰影を与える。一方『七勇婦伝』では、悪人は必ずむくいを受けて滅び、善人は必ず救われて大団円となる。この単純さに、娯楽を求める読者は痛快な楽しさを感じる。



さて、このように共通点について述べてきたが、前号でも触れたように、『七勇婦伝』が出た文政十年正月の時点で、関係性を指摘した『八犬伝』の第六輯・第七輯は刊行されていないのである。第六輯の刊行は文政十年三月頃、第七輯の刊行は文政十三年（天保元年）なのである。『七勇婦伝』は『八犬伝』の模倣作であるとされてきたが、少なくとも三編は、刊行後の『八犬伝』を模倣したものではないと言えよう。

『七勇婦伝』の作者が永春水が、刊行前の『八犬伝』の内容をいかにして知ったのか。それについてはまた稿を改めて述べたいと思うが、前回の号でも述べたように、『七勇婦伝』『八犬伝』両作品の挿絵を描いた絵師溪斎英泉の存在、『八犬伝』第七輯の第一稿完成後、版元との不具合により、刊行まで間があいたこと、版元の関与などがあるのではないかという見通しを、現時点では持っている。

#### b、本作品に描かれた山姥について

ところで本作品に描かれた山姥には、注目すべき点がある。それは「好色」で若い男をさらう点と、「宝玉」を持っている点である。

本作品の本文中には、山姥についての一般的な認識について述べた部分がある。

山姥とかいふものは、世にいふ坂田の公時が母にて、さる変化にてはあらざるべきにいといぶかし（七十四丁裏・七十五丁上表）

山姥といふものは、かの頼光が臣下たる金時が母にして、させる変化のものならぬよしをば聞けり。いかでかくの如きよこしまの

ことを成さんや。これ全く俗説の甚だしきなり。信ずるに足らず。（七十五丁上裏・七十五丁下表）

\*引用部分は筆者が適宜漢字をあて、句読点をほどこした

それぞれ富屋久平、三勇婦の言葉である。これらが示すのは、「坂田金時の母」という認識である。山姥に対するこの認識は、金平浄瑠璃や近松門左衛門作『嬬山姥』（正徳二年九月以前、大坂竹本座初演）で上演され、富本節『母育雪問答』（文化二年十一月中村座『清和源氏二代将』二番目所作事として上演）、清元節『月花茲友鳥』（文政六年十一月市村座『大和花山樵』所作事）で歌われ、演劇や音曲の伝統の中で出来上がった人物像である。

また本作品では、才次郎をさらう際に妖術を使ったり、さらってきた若い男たちを幻術で迷わせたり、美女に化けたりという行動、そして「辺りを見回す顔色は、以前の装ひに変はり、眼は百鍊の鏡の如く、口は耳まで裂けてさも恐ろしき顔にて、飛びかからんとしけれど（七十八丁表・裏）」という容姿の描写から、「鬼女」という面も付加されていると思われる。山に住む鬼女が術を使い、美女に化け、男を誘惑するのは、戸隠山の鬼女伝説を描いた謡曲『紅葉狩』にも描かれたことであり、広く知られていたと思われる。しかし『紅葉狩』の鬼女は、男を誘惑するけれども、さらってきたり集めたりはしない。つまり先に挙げた「好色で若い男をさらう」「宝玉を持つ」という点は、こういった演劇の作品に登場して作り上げられた山姥像からは外れているということになる。

本作品に登場する天城山の山姥を、あらためて本文から確認する。

この天城山には山姥といふ変化住みて、見目良き男をさらひ行き

で交合を求むるよし。昔の山姥にさらはれし美少年ありしと聞けり。(中略)いかにも山姥・山男などいふ変化、深山幽谷には住めるよし。なかんづく山姥といふものは、女の身にして男無きゆゑ、男を見る時はさらひゆきて交合を求むるといふこと。漢土のふみにも見へたり。(七十四丁裏・七十五丁上表)

傍線部のように、男をさらって交合を求めるものとしておりそれは「漢土のふみ」に見えるとしている。

文窓はしばし押し止め、「わらは伝へ聞きしことあり。山姥といふものの腰間には、佩といふものあり。これ玉の類いにして世に稀なる宝なるよし、漢土のふみに見へたり。」(七十九丁裏・八十丁表)

と宝玉について述べ、これもまた「漢土のふみ」にあるとしている。これら二つの事項について調べたところ、該当する例を一つだけ見出すことが出来た。それは『和漢三才図会』の記述である。『和漢三才図会』巻第四十、「寓類性類」の項に、「野女 やまうば 俗云山姥 蓋猩猩之類」として載る。その解説には、

本綱野女(中略)毎遇男子則必負去求合、嘗為健夫所殺死、以手護腰間、剖之得印方寸宝若蒼玉(後略)

とあって、男を連れ去ること、腰に宝玉があることが記されている。本作品の山姥は、演劇的な伝統だけでなく、『和漢三才図会』の記述も取り入れて作られた所に面白さがある。「好色で若い男をさらう」

「宝玉を持つ」という特徴は、話の流れの中でうまく生かされている。なお、天城山に山姥が住むという伝説は、管見の限り見出せていない。

#### c、話の展開について

『繫馬七勇婦伝』三編後半の特徴は、話の筋展開の早さにある。十五丁の中で、話の舞台は宇都宮・武蔵国石浜・伊豆国天城山と移り、それぞれの場所で、

〈宇都宮〉武次・文窓・小三による音木救出。四勇婦そろろう。

〈石浜〉小三の父の敵乙部梅之丞を三勇婦が討ち果たす。

〈天城山〉山姥を三勇婦が退治する。

という出来事が描かれていく。武次・文窓が再登場し、新登場の小三も加わって、武勇を示す。その面白さは武次・文窓・小三の言う次の言葉に象徴される

「この三人は子細あつて若衆姿にやつしおれど、まことは女なり。そのわけは後にて詳しく語るべし。まづそれはさしおきて、もしやその言葉に違いなくは、いとおしきことなり。女子は相身互いといへば、何とお二人さん、力を添へてその化物を退治しよふではあるまいか」と聞いて二人もうち喜び「成程このよふに諸国を歩くも女に似合わぬ事ながら、武辺修業の私らなれば、いかにもその山姥の化物を退治するとはおもしろからん。」「これまで女が変化にとられ、強い男が助けたは、草双紙や狂言にいくらもあれど、そのよふな美しいお若衆さんが、しかも女の化物にさらわ



れたのを、私らが女の際に腕立てして、とりかへそふとはお二人さん、よつぽどおしが強者ではござんせぬか」と、口合言ひうちわらふにぞ（七十五丁下裏・七十六丁表）

山姥退治を請け負った時の言葉であるが、三編後半の出来事のうち、音木救出と山姥退治は、若衆姿で好色な女に立ち向かった話である。また梅之丞への敵討ちでは、悪の美少年梅之丞を女姿で討ち取り、首を取って亡父の墓へ供えるという、姿に合わせ武勇にすぐれた行動をする。七勇婦の行動は、傍線部に示したように、行きすぎと思えるほど大胆でたくましい。

そしてこの言葉は、作者為永春水が、『七勇婦伝』三編を描く際に意図したものであった。草双紙や狂言で従来描かれてきた趣向を、全く逆にしたその面白さ。先に『八犬伝』との関係に触れた際に、『七勇婦伝』の重視したのは読者の娯楽性であると述べた。春水に作家としての自負や、頑強な論理主張があったとは思えないが、彼は合巻という世界で、読者に痛快な娯楽を提供することに、卑屈なまでの態度で徹したのである。

## 【公開論文についての補足事項】

- ・論文執筆にあたっての凡例については、次頁以降の『叢』見返しを併せて参照されたい。
- ・論文発表時の訂正事項については、次頁以降の正誤表を参照されたい。

・原稿内で原本画像を表示しているものについては、東京学芸大学リポジトリからの公開にあたり、原本所蔵先より改めて掲載許可を得た。掲載をご許可いただいた関係諸機関には、ここに記して深謝申し上げます。

・原本画像、参考図版を非表示にしているものについては、原本画像公開先（ホームページアドレス）及び掲載資料を該当箇所に示した。併せて参照されたい。



本書は、平成14年度科学研究費（基盤研究（C）（1））「江戸時代初期草双紙の特色解明のためのデータ集積による集成的研究」（科研費一四五二〇四五九）に拠る研究成果です。



複写部分は、国立国会図書館、東洋文庫内岩崎文庫、東北大学附属図書館狩野文庫、東京都立中央図書館、大東急記念文庫、慶応義塾大学三田メディアセンター、肥田皓三先生のご所蔵書を利用させていただきました。

各位のご厚意に感謝申し上げます。

## 凡例

一、各丁は、片面あるいは見開きごとにまとめて丁数を示し、上段に原本の写真版コピーを、下段にその文字部分の翻字を示した。

二、翻字は、紙面の許す限り、原本の文字遣い、表記記号、及び文字の位置を忠実に再現した。また、以下の原則に基づいた（ただし、この凡例と異なる場合は、翻刻者がその原則を個々に示した）。



- (1) 文中における片仮名「ミ」「ハ」「ニ」「ワ」及び合字「」「」は、それぞれ「み」「は」「に」「わ」、「より」「こと」と平仮名で表記する。
- (2) 感動詞として意識的に用いられていると思われる片仮名「エ」、「アレ」などは、原本のまま片仮名で表記する。
- (3) 漢文訓読体の送り仮名や、捨て仮名として用いられている片仮名は、原本のまま片仮名表記とする。

(4) 異体字及び旧字体は、現行標準字体が明らかなものはそれに改めて表記し、特殊なものは原本に忠実に表記する。

(5) 「兵へ」「右衛門」「左衛門」などは、それぞれ「兵衛」「右衛門」「左衛門」と表記する。

(6) その他、特殊なものや文字に意識的な意義付けがされているものは、原本に忠実に表記する。

三、翻字において使用した記号は、以下の通りである。

- (1) 翻字不能の箇所は、その文字数だけの○印で示した。
- (2) 判読不能の箇所は、○○○○で示した。
- (3) 翻刻が不確かな箇所は右側に傍線を付した。
- (4) 判読不能ではあるが、典拠との比較や前後関係から推定した箇所は（ ）で示した。
- (5) 判読不能ではあるが、他本との比較によって推定した箇所は「」で示した。
- (6) 各作品ごとに使用した記号については、その都度示した。

頁	行	種類	内 容
二六	下*部分	訂正	真衡嫁娶併与秀不不和事↓真衡嫁娶併与秀武不和事
三九	上一	訂正	慶応大学旧図書館蔵本↓慶応大学図書館旧館蔵本
五五	上一二	訂正	八幡太郎義家を中心をすえ↓八幡太郎義家を中心にしえ
一〇二	下三	訂正	六第將軍↓六代將軍
一〇四	下二二	訂正	作品への取り込む↓作品に取り込む
一〇八	上二二	追加	(巻表、二丁、六丁く十五丁) ↓ (巻表、二丁表・裏、六丁表く十五丁裏)
一一一	二丁裏	訂正	折より↓打より
一二六	二丁表	訂正	さることは↓かゝることは
一二七	二丁裏	訂正	りうぐらん↓りうぐう○
一三一	六丁裏	追加	ちかたといふものかれ↓ちかたといふものかゝれ
一三五	十丁裏	訂正	ひめ様↓ひめ君
"	十一丁表	訂正	たすけ来り↓たすけ奉り
一三七	十三丁表	訂正	おもひしつたり↓おもひしつたか
一三九	十四丁裏	訂正	たすけらる↓たすけ奉る
一五〇	二段目 一三	訂正	本書では↓大東島本では
一五四	上二二	訂正	『毘沙門本堂』(古今集序註) ↓ 『毘沙門堂本注』(古今集序註)
一五八	上一八	訂正	『面向不背珠』 ↓ 『面向不背玉』
一六二	下一五	追加	豊かさある↓豊かさがある
一六三	上九、 一一	訂正	赤尾照文庫↓赤尾照文堂
"	上一九	追加	『歌舞伎評判記集成』第四巻 ↓ 『歌舞伎評判記集成』第一期第四巻 以下『歌舞伎評判記集成』については同じ
"	下二二	訂正	寺良良安↓寺島良安
一七七	十丁表	削除	有るか↓有か
一八五	下一三	訂正	ぜにとるちと↓ぜにとるりと
一九四	上四	訂正	孫孫孫 ↓ 孫孫孫
二〇二	七丁裏	追加	き様 ↓ ちき様たち
"	"	追加	か ↓ も同し ↓ かうも同し
"	八丁表	追加	皆々 ↓ だか ↓ 皆々はだか
"	"	追加	とる ↓ こまかしよ ↓ とるとつこまかしよ
二〇七	上二八	訂正	姿を写す ↓ 姿を映す
"	下六	訂正	その成立以降 ↓ 近世以降
二一九	左下	訂正	御だんぎで ↓ 御だんぎで
二三二	右下	訂正	ことく ↓ ことく
二三四	上一七	削除	一乗寺村 ↓ 一乗寺村
"	下一	削除	道也 ↓ 道也
"	下八	削除	我が子 ↓ 我が子
"	下一〇	訂正	夢現 ↓ 夢現
二三五	上六	訂正	ござる ↓ ござる
"	下九	訂正	三丁表・四丁裏 ↓ 三丁裏・四丁表
二三六	上七	削除	市村 ↓ 市村
"	上一一	削除	日暮れければ ↓ 日暮れければ
"	下一一	削除	草枕 ↓ 草枕
二三七	上二〇	追加	御影堂 ↓ 御影堂
"	下一一	削除	六波羅 ↓ 六波羅



二三八	上二	削除	苦 <sup>く</sup> し <sup>し</sup> の <sup>の</sup> 内 <sup>の</sup> にも <sup>も</sup> ↓苦 <sup>く</sup> し <sup>し</sup> の <sup>の</sup> 内 <sup>の</sup> にも <sup>も</sup> 。
二三九	上二	訂正	給 <sup>く</sup> は <sup>は</sup> す <sup>す</sup> ↓給 <sup>く</sup> わ <sup>わ</sup> す
"	下六	訂正	白 <sup>はく</sup> の <sup>の</sup> 石 <sup>いし</sup> ↓白 <sup>はく</sup> の <sup>の</sup> 石 <sup>いし</sup>
二四〇	上二	訂正	「萬 <sup>まん</sup> 日 <sup>にち</sup> 」↓「万 <sup>まん</sup> 日 <sup>にち</sup> 」
"	下二	訂正	心 <sup>こころ</sup> ↓心 <sup>こころ</sup>
二四一	上二	訂正	よく <sup>よく</sup> 俺 <sup>おれ</sup> を <sup>を</sup> ↓よく <sup>よく</sup> 俺 <sup>おれ</sup> を <sup>を</sup>
二四二	上二	訂正	この↓此
二四四	下八	訂正	三丁 <sup>さんてい</sup> 表 <sup>へ</sup> ・四丁 <sup>よんてい</sup> 裏 <sup>うら</sup> ↓三丁 <sup>さんてい</sup> 裏 <sup>うら</sup> ・四丁 <sup>よんてい</sup> 表 <sup>へ</sup>
"	上二	訂正	号 <sup>ごう</sup> 御 <sup>ご</sup> 影 <sup>えい</sup> 堂 <sup>どう</sup> ↓号 <sup>ごう</sup> 御 <sup>ご</sup> 影 <sup>えい</sup> 堂 <sup>どう</sup>
二四五	下八	訂正	七丁 <sup>しちてい</sup> 表 <sup>へ</sup> ・八丁 <sup>はちてい</sup> 裏 <sup>うら</sup> ↓七丁 <sup>しちてい</sup> 裏 <sup>うら</sup> ・八丁 <sup>はちてい</sup> 表 <sup>へ</sup>
二四六	上九	訂正	「京 <sup>きやう</sup> 童 <sup>どう</sup> 」↓「京 <sup>きやう</sup> 童 <sup>どう</sup> 」
"	上六	追加	『国語大辞典』↓『日本国語大辞典』
"	下九	訂正	『念仏往生記』第三（別称『大原問答』）↓『念仏往生記』（別称『大原問答』）第三
二四七	下二	訂正	能 <sup>のう</sup> 保 <sup>ほ</sup> の <sup>の</sup> 膝 <sup>ひざ</sup> にある <sup>にある</sup> ↓能 <sup>のう</sup> 保 <sup>ほ</sup> は <sup>は</sup> 膝 <sup>ひざ</sup> に <sup>に</sup>
二五〇	上二	追加	『趣向気工』↓『仙傳秘法 趣向気工』
二五二	一丁表	訂正	鰻 <sup>うなぎ</sup> ↓鰻 <sup>うなぎ</sup>
二六三	下二	追加	頼 <sup>たの</sup> みに <sup>にくる</sup> ↓頼 <sup>たの</sup> みに <sup>くる</sup> 。
二六五	上六	追加	入 <sup>い</sup> 定 <sup>てい</sup> ↓入 <sup>い</sup> 定 <sup>てい</sup>
二六六	上二	追加	勞 <sup>らう</sup> ↓勞 <sup>らう</sup> 察 <sup>さつ</sup>
二六七	上四	訂正	酩 <sup>めい</sup> 酩 <sup>めい</sup> ↓宿 <sup>しゆく</sup> 酩 <sup>めい</sup>
"	下五	追加	嘔 <sup>おう</sup> ↓嘔 <sup>おう</sup> 噦 <sup>かい</sup>
二七三	下六	削除	仕 <sup>し</sup> 掛 <sup>か</sup> ける <sup>。</sup> ↓仕 <sup>し</sup> 掛 <sup>か</sup> ける <sup>。</sup>
二七四	下五	削除	福 <sup>ふく</sup> 種 <sup>しゆ</sup> 笑 <sup>わら</sup> い <sup>。</sup> 門 <sup>かど</sup> 松 <sup>まつ</sup> ↓福 <sup>ふく</sup> 種 <sup>しゆ</sup> 笑 <sup>わら</sup> い <sup>。</sup> 門 <sup>かど</sup> 松 <sup>まつ</sup>
二七五	上二	削除	（効 <sup>く</sup> く）という <sup>。</sup> ↓（効 <sup>く</sup> く）。
二七六	下二	訂正	西 <sup>せい</sup> 洋 <sup>やう</sup> 化 <sup>か</sup> 学 <sup>がく</sup> ↓西 <sup>せい</sup> 洋 <sup>やう</sup> 科 <sup>か</sup> 学 <sup>がく</sup>
二七九	下二	訂正	ぼん <sup>ぼん</sup> を <sup>を</sup> ど <sup>ど</sup> り <sup>り</sup> ↓ぼん <sup>ぼん</sup> お <sup>お</sup> ど <sup>ど</sup> り
"	下二	追加	美 <sup>み</sup> ど <sup>ど</sup> う <sup>う</sup> ↓美 <sup>み</sup> ど <sup>ど</sup> う
二八五	下二	訂正	し <sup>し</sup> よ <sup>よ</sup> じ <sup>じ</sup> ↓し <sup>し</sup> よ <sup>よ</sup> ぢ <sup>ぢ</sup>
二八六	下二	追加	た <sup>た</sup> ま <sup>ま</sup> と <sup>と</sup> い <sup>い</sup> つ <sup>つ</sup> く <sup>く</sup> し <sup>し</sup> み <sup>み</sup> ↓た <sup>た</sup> ま <sup>ま</sup> と <sup>と</sup> め <sup>め</sup> で <sup>で</sup> い <sup>い</sup> つ <sup>つ</sup> く <sup>く</sup> し <sup>し</sup> み <sup>み</sup>
二八八	上二〇	訂正	や <sup>や</sup> ま <sup>ま</sup> お <sup>お</sup> と <sup>と</sup> こ <sup>こ</sup> ↓や <sup>や</sup> ま <sup>ま</sup> を <sup>を</sup> と <sup>と</sup> こ
二八九	下六	訂正	次 <sup>つぎ</sup> へ <sup>へ</sup> ↓つ <sup>つ</sup> ぎ <sup>ぎ</sup> へ
二九〇	下三	訂正	お <sup>お</sup> よ <sup>よ</sup> ひ <sup>ひ</sup> け <sup>け</sup> る <sup>。</sup> ↓お <sup>お</sup> よ <sup>よ</sup> ひ <sup>ひ</sup> け <sup>け</sup> る <sup>。</sup>
二九四	下二	訂正	つ <sup>つ</sup> ぎ <sup>ぎ</sup> へ <sup>へ</sup> ↓次 <sup>つぎ</sup> へ
二九八	上二五	訂正	學 <sup>がく</sup> ね <sup>ね</sup> た <sup>た</sup> ↓訪 <sup>ほう</sup> ね <sup>ね</sup> た
三〇〇	上二六	追加	【幕末・明治の豆本の武者物】…は判読不能
"	下二〇	追加	②その他（表中） 武者 未詳 未詳 個人蔵
三一二	上二	訂正	戦 <sup>せん</sup> 勝 <sup>しょう</sup> ↓戦 <sup>せん</sup> 将 <sup>しょう</sup>
三二〇	下七	追加	⑤判読不能の箇所は点線で示す。
三二九	上四	訂正	新 <sup>しん</sup> 版 <sup>ばん</sup> 図 <sup>ず</sup> 録 <sup>ろく</sup> ↓新 <sup>しん</sup> 版 <sup>ばん</sup> 目 <sup>め</sup> 録 <sup>ろく</sup>
"	上九	追加	上 <sup>かみ</sup> 下 <sup>した</sup> 、料 <sup>りょう</sup> 理 <sup>り</sup> ↓上 <sup>かみ</sup> 下 <sup>した</sup> 料 <sup>りょう</sup> 理 <sup>り</sup>
"	下二五	訂正	持 <sup>も</sup> て <sup>て</sup> 成 <sup>なり</sup> し <sup>し</sup> ↓も <sup>も</sup> て <sup>て</sup> な <sup>な</sup> し
三三〇	下二四	削除	嵐 <sup>らん</sup> 三 <sup>さん</sup> 夕 <sup>せき</sup> な <sup>な</sup> ど <sup>ど</sup> の <sup>の</sup> に <sup>に</sup> ↓嵐 <sup>らん</sup> 三 <sup>さん</sup> 夕 <sup>せき</sup> な <sup>な</sup> ど <sup>ど</sup> の <sup>の</sup>
三三六	上二七	訂正	行 <sup>い</sup> つ <sup>つ</sup> て <sup>て</sup> い <sup>い</sup> る <sup>。</sup> ↓言 <sup>い</sup> つ <sup>つ</sup> て <sup>て</sup> い <sup>い</sup> る <sup>。</sup>
三三七	下二八	訂正	天 <sup>てん</sup> 上 <sup>じやう</sup> 人 <sup>にん</sup> ↓殿 <sup>てん</sup> 上 <sup>じやう</sup> 人 <sup>にん</sup>
三三九	上二一	訂正	打 <sup>う</sup> 手 <sup>て</sup> ↓討 <sup>う</sup> 手 <sup>て</sup>
三四〇	上六	訂正	屋 <sup>や</sup> 標 <sup>ひょう</sup> お <sup>お</sup> よ <sup>よ</sup> び <sup>び</sup> 六 <sup>りく</sup> 丁 <sup>てい</sup> 表 <sup>へ</sup> 上 <sup>じやう</sup> 部 <sup>ぶ</sup> の <sup>の</sup> 屋 <sup>や</sup> 標 <sup>ひょう</sup> よ <sup>よ</sup> る <sup>。</sup> ↓商 <sup>しやう</sup> 標 <sup>ひょう</sup> お <sup>お</sup> よ <sup>よ</sup> び <sup>び</sup> 六 <sup>りく</sup> 丁 <sup>てい</sup> 表 <sup>へ</sup> 上 <sup>じやう</sup> 部 <sup>ぶ</sup> の <sup>の</sup> 商 <sup>しやう</sup> 標 <sup>ひょう</sup> に <sup>に</sup> よ <sup>よ</sup> る <sup>。</sup>
"	上二六	追加	竹 <sup>たけ</sup> 取 <sup>と</sup> 熊 <sup>くま</sup> 衛 <sup>ゑ</sup> 門 <sup>もん</sup> ↓竹 <sup>たけ</sup> 取 <sup>と</sup> 熊 <sup>くま</sup> 右 <sup>みぎ</sup> 衛 <sup>ゑ</sup> 門 <sup>もん</sup>
三四八	下七	訂正	幻 <sup>まげ</sup> 想 <sup>そう</sup> ↓玄 <sup>げん</sup> 宗 <sup>そう</sup>